

シナ如来蔵思想

小 川 弘 貫

宋朝は北宋の西紀九六〇—一一二六、南宋の一—二七—二七九、約三二〇年位であるが、その間の南宋の圓悟克勤禪師、大慧宗杲禪師、宏智正覺禪師等の遺録の中にみらるる如来蔵思想、仏性思想等を探つてみたいと思うのである。圓悟禪師には如来蔵、仏性等の所説は甚だ多い。大きくは三類に分けることが出来るであろう。第一類は如来蔵思想で如来蔵、本有性、本性、性、妙性等の言葉で表わされるものであり、第二類は仏性思想で仏性、仏種姓、正因等の言葉で表わされるものであり、第三類は心性、自性、正性、真心、本心、妙体等の言葉で表わされるものである。

第一類は、

一、坦然居士為眞沙弥作齋 上堂、僧問、達磨未伝心地印、釈迦未解髻中珠、有人若問西来意、還有西来意也無、師云、庭前石獅子。

二、群靈一源仮名為仏、体竭形消亦不滅、金流朴散而常存、於一切現一切而普該、於一切現一而無刹不遍、同古同今契物契我、正体

一如非生非滅、所以發生滅去身、本如来蔵妙真如、夫如是則生未嘗生滅未嘗滅去來嘗去來、未嘗來却處是箇、如来蔵体真如正性、三、無始の妄習の翳障を以て強いて智解を作して独脱すること能はざるのみ、……心を息し力を絶して体究す、諸の妄縁を離れ、如々の性を了じ……。

四、達磨西来豈に此の法を將ち得來らんや、他惟だ各々当人本有の性を直指して出徹明淨にして如許の惡智惡覺忘想計較の染汚する所を為らざらしむ

五、聖賢迹を混すと雖も、方便を以て此の段の賢愚を隔てず、皆己が本有なることを顯示せんことを要す。

六、仏祖の妙道は唯各人根本の上在り、実に本淨妙明無為無事の心を出でず、久しく誠を存すと雖も未だ能く諦実ならざること蓋し無始の聡利智性多く作為して之を混らせればなり……。本有の性金剛の堅固なる如く鎮長に只在り未だ會て斯須くも間斷せず、

七、祖師諸仏の单伝顯示人人脚跟下本有の性を出でず、唯聖凡器界根塵の正体歷劫より以來會て未だ間斷せず但各人妄想縁塵を

以て醫障す。

八、此の本有の性は現定の見聞覚知なり……若し向來解に隨はば即ち業識に墮す、若し猛しく擺撥して……一念不生の地に到り……、截徑承当して第二頭なし、則ち玄妙理性尚自ら脱去す。

九、本有性金剛の堅固なるが如く鎮長に只在り、未だ曾って斯須くも間断せず、

十、狂妄の心を放下して直に絲毫も念に掛けざらしめ、本淨无垢寂滅円妙本性の中に向って徹底承当せば、能所双忘し言思路絶して廓然として明に本来面目を見、一得永得堅固にして動かさざらむ、

十一、初より汚染無うして本性凝寂なり、但妄想の條ち起りて之を醫障するが為に六根六塵に來す、根塵相對するが為に黏式執着す、

十二、一切平心なれば心も亦了に不可得なり、泯然として自ら尽く、則ち本性円妙にして混成す、

十三、流動の時に向って本性を徹見すれば二辺を超出して中道に居せず、安んぞ違順憂喜愛憎を存して、自ら受用を罣礙せしむ可けんや、

十四、如今直截に承当せんと要せば、但、身心を辨着して冥然として寂を叩き心機を喪却して一へに土木の如くにして渠が時節到來を待って儻然として自ら桶底子脱して比本光に契ひ此の湛々澄々不変不動清淨无為妙淨明の性を了らん、

十五、宿植の根性敏利にして一念不生なれば頓に二十五有を超え

シナ如来藏思想(小川)

て自己本有如々妙性を円成して更に毫髮許りの能所彼我を生ぜず、廓然として大に達しぬれば凡聖平等にして、彼我如々たり、十六、固に宜しく鉄石の心を操りて、生死の流を截り、本来の正性を承当すべし、

一、一十六、の如きものであるが三、四、六、七、八、十、十一、十三、十五、十六、等は如来藏思想を全体的によく表わしている。三、を吟味すれば如々性は如来藏を表わし、無始の妄習や妄縁は煩惱藏を表わし、妄縁を離れ如々の性を了じは断煩惱藏顯如来藏を表わしている。二、五、九、十二、等は如来藏、如来性をとくものであるうし、煩惱藏をとくものとしては四、の悪智悪覚妄想計較、六、の無始の聡利智性、七、十一、の妄想縁塵、八、の業識、十、の狂妄の心、十三、の違順憂喜愛憎、十五、の能所彼我等であるう。如来藏、如来性は無差別の一であるから表現は簡單であるが、煩惱藏は差別の諸法であるから八万四千無量無数である。十四、は煩惱藏を断じ如来藏を顯すところをよく表わしているといえるであろう。

第二類は仏性思想である。其の一は仏性等であるが、

一、八月一日上堂云、……有一物上控天下控地常在動用中、動用中不得、謂之本源仏性顯成、智解宗徒更出、説示一物即不中……。
二、乃云、欲知仏性義當觀時節因縁、時節若至、理地未明、便乃業識茫茫无本可拠、敢問諸出、即今是什麼時。

三、古提は無仏性。

四、古提の僧の来るを見て便ち云く、退後退後汝仏性無しと。

五、百千妙用縦横十字頂に透り底に透りて、明に仏性を証す。

六、所謂无明の実性即仏性 幻化の空身即法身なり。

七、只、闕を守りて眉を閉じ眼を合して露柱灯籠に參ぜんことを要せば、也須く仏種姓有ることを知る底なるべし、

八、一機一句一言皆法界を含み本真如に称ふ情想計処起滅の処なし、この正印を以て一印印定すれば、自然に方に随つて円を逐いて悉く二種に非ず、他古より明に仏性を見る。

九、昔、則老の青林に問うが如くんば「如何なるか是れ仏」

対へて云く「丙丁童子来求火」渠便ち語言に入りて通理を作す、

便ち謂く「丙丁は是れ火、更に來りて火を求む、我是れ仏なるに更に來りて仏を問うが如し、法眼の究窮撥正するに至るに及んで他即ち大に信ぜず、翻然誠を投ずるに及んで法眼亦只前の如し云々」渠大悟、蓋し風に當りて証驗始めて回光することを解す。

一、は本源としての仏性、五、は本性としての仏性、六、

は即仏性とでもいうか、八、は非二としての仏性、七、は求

道としての仏性とでもいえるものであろう。一、五、六、八、

は宗教的当体としての仏性、七はその宗教的当体の動きとし

ての仏性ということが出来るであらう。三、四は無仏性の語

である。九、は周知の則公監院の丙丁童子来求火である。其

二は正因という言葉で表わされるもの。

十、叢林の兄弟參問、最初に的に正因有り……元初の正因を失却

して却て魔界に墮在し去ることを、

十一、可の中頓に正因を悟りぬれば便ち是れ出塵の階墮なり、

十二、爾らずんば必ず魔藥ありて正因を壊破せん、

十三、我見を増長して皆正因に非ず、

十四、可の中頓に正因を悟れば便ち是れ階墮なり、

十五、仏祖教を垂るるを、之を清淨の明誨と謂ふ、當に須く此の

正因に依るべし、然る後當に妙果を証すべし、

十六、良に最初に己に正因無きに由つて、所以に末後に勞して功

なし。

如来藏思想は如来性の本有とその隱顯の問題であり、仏性思

性は仏性の本有とその因果の問題であるということが出来る

と思う。ここからみるととき正因という言葉で表わすことも亦

適當とも云へるであらう。十、は參問としての正因、十五、

は教としての正因等で教行等の正因、十一、十四、等は悟正

因で正因の証とでもいうことが出来るであらう。十二、十

三、十六、等は正因の無、非、破等である。

第三類は心性、自性、正性、真心、本心、妙体等の言葉で

表わされる一、一十三、である。

一、皆眼裏耳裏機鋒語句の上、悉皆是れ仏性心性玄妙なり、

二、近世謂へることあり、杖を以て人を接するは皆機境に墮す、

直に須らく心性を究了し玄妙を談極して時中に向つて綿々密々と

して針あり綿ありて方に可なるべし、

三、祖師は只人の見性を要す、諸仏は只人をして心を悟らしむ、心性既に真にして純一無雜なれば則ち四大五蘊六根六塵一切の等有皆是れ自己放身捨身の処にあらざるなし、

四、游歴して底を築いて其の志愈々確し、莫馬地に脱去して、直に仏祖心性の淵源に徹す、深く理妙に入りて踐履説案二ながら通ず、

五、須らく経截超証して心性玄妙勝淨境界を透出せんことを要す、

六、本源天真の自性なり千万人の中に居すと雖も一人無きが如くに相似たり、

七、直指を論ぜば只人人本有なり、穀子の裏に全体応現す、従上の諸聖と絲毫許も移易せず。所謂天真自性本淨明妙にして十塵を含吐し根塵独脱する一片の田地なり。

八、脱体全真にして妙明の真心に契り本来清淨なり、只自己本来の面目は是れなり、

九、無始来、亦未だ曾て間断せず、清淨無為妙円の真心なり。

十、迷妄を以て此の本心に背く。

十一、本心に於て初より彼我是非勝負欣厭なし。

十二、靈光独り耀りて廻に根塵を脱す、須く直下に従本以来自有底の活卓々の妙体を承当せんことを要す。

この第三類も一―六、(心性)を其一とし、七―十二、を其二とする。四、五、六は心性の性質をとくものというか四、の根源としての心性、五、六の超証絶体としての心性、一、三

は心等法の心性、二、は接物としての心性とみることが出来るであろう。其二の中七、八、九は自性、真心等といわれているが自性真心の天真本淨明淨、脱体全真妙明清淨、常住清淨、無為妙円等の性質をとくものであり、十二、十一は、自有の妙体、非二の本心をとくものであり、十は迷妄对本心の本心をとくものである。

大慧禪師の仏性についての所説は大要三類であるということが出来るであろう。第一類は仏性についての所説、第二類は仏性の喻示としての所説、第三類は問答の材料として使用される趙州狗子仏性の話、この三類である。

一、這の一絡索既に生なるときは、菩提涅槃真如仏性も便ち現前すべきなり。

二、第一生には痴福を作して性を見ず(痴福を作すは是れ第三生の宛なり)

三、人中等一に衆生界中に仏種をして不断ならしむることを得…

四、一切国土差別を了知して仏種性に入りて彼岸に至る。

五、其の断見というは、自心本妙の明性を断じ滅却して一向に心外に空に著し禪寂に滞るなり。

六、般若の智水を以て垢染の穢を滌除して清淨にして自居し…

第一類は仏性、性、仏種、仏種性、自心本妙明性、般若智水等の言葉で表わされる仏性の所説である。四、は無差別の仏性と差別の諸法との対でみらるる仏性の意義がみられ、六、

は般若智水の如来性、垢染の穢の煩惱蔵、之を滌除して清淨にして自居の断煩惱蔵頭如来蔵の、如来蔵思想としては纏つた形態を備へたものである。二、は痴福の煩惱蔵、性の如来性である。三、は仏種不断相統をとくものであり、一は悟後の境涯に仏性現前しているところを説くのであろう。五、は特殊の例であらうが断見を説明するのに断自心本妙明性と仏性を断ずる意味で之をといっている。以上の如き如来蔵思想仏性思想が見らるるのである。

一、古来得発の士：機に応じ物に接す、明鏡の台に当り、明珠の掌に在って、胡来胡現漢来漢現する如し。

二、長河を攪して酥酪となし大地を變じて黄金となし縱奪殺活自由利他自利施として可ならずということ無けん。

三、清淨摩尼宝珠を泥濛の中に置くが如し、百千万を経れども亦染汚すること能はず、本来自ら清淨なるを以故。

四、糞掃推頭に無価の宝を収め得て百劫千生受用すれども尽きずして方に始めて真貴となすのみ、無価宝受用不尽。

五、日輪の遠近斯に照すが如し、靈燭妙明にして鍛鍊を仮るに非ず。修証を超えた靈燭法界周遍の功德たる日輪性。

第二類は仏性の喻示とでも言うことが出来るものであろう。

明鏡、明珠、長河の酥酪、大地の黄金、清淨摩尼宝珠、無価の宝、日輪、靈燭の喻示される仏性である。三、は本来自性清淨、泥中不染汚の摩尼宝珠に喩えらるる仏性、五、修証を

超えた靈燭、法界周遍の功德たる日輪に喩えらるる又四、受用不尽の無価の宝に喩えらるる仏性、一、応機接物自由自在の明鏡明珠、二、長河の酥酪、大地の黄金、自利利他物に喩えらるる仏性である、三、の如来性五、四、や一、二、の仏、仏徳を表わす仏性、その喻示とみるべきであらう。

第三類書中最も多く出てくるころのもので所謂趙州狗子仏性の話である。之も仏性の意義を示すものもあれば、無學觀のもの、その提撕、或は言葉のみのものもある。

一、妄想顛倒底の心、思量分別底の心、好生惡死底の心、知見解會底の心、欣靜厭鬧底の心を將て一時に按下して只按下の処に就て箇の話頭を看よ、僧、趙州に問ふ、狗子に還って仏性ありや也た無しや、州云く、無、比の一字子、乃ち是れ許多の惡知惡覺を摧く底の器仗なり、

二、此の一字子、便ち是れ箇の生死疑心を破る底の刀子なり、這の刀子の櫛柄只当人の手中に在り：自家手を下して始めて得べし三、切に意根下に向って卜度すべからず、言語上に向って活計をなすべからず、

四、但只此くの如く參ぜよ、

五、正恁麼時香爐上一点の雪の如く相似たり、

六、請う只閑思量底の心を把って無の字の上に回在して試に思量して看よ忽然として思量不及の処に向って這の一念破することを得ば便ち是れ三世を了達する処なり。

七、尋常聰明なる人は纔に挙記することを聞いて便ち心意識を以

て領會し博量引証して説き得て分付する処あらんを要す…。

八、只這の一字、爾に儘す、甚麼の伎倆かある、…只這の無字の上にて提擲業。

九、只趙州一箇の無字を以て、日用応縁の処に提擲せよ、間斷することを要せざれ、

十、只管提擲し挙覺せよ、

左来も也た不是、右来も也た不是なり、心を將って悟を等つことを得ざれ、

挙記の処に向て承当することを得ざれ

玄妙の領略を作すことを得ざれ

有無の商量を作すことを得ざれ

真実の無の卜度を作すことを得ざれ

無事用裏に坐在することを得ざれ

擊石火閃電光の処に向て会することを得ざれ、

直に心を用うる所なく心のく所無きことを得ん時空に落ちんことを怕るること莫れ、

一、百丈云く、仏性の義を識らんと欲せば当に時節因縁を觀すべし、時節もし至りぬれば其の理自ら彰はる、と

二、古徳云く、仏性の義を識らんと欲せば当に時節因縁を觀すべし、と

三、仏性の義を識らんと欲せば当に時節因縁を觀すべし、

右の中三、五、は仏性の意義或は無の意義をとくものとみる
ことが出来るであらうし、一、二、四、六、等は無字觀、八

シナ如来蔵思想(小川)

九、十等は無字觀の提擲とでも云へるものであるがこの無字觀と無字觀の提擲は同じものの両面であるから同一に扱つてもよいと考へらるる。而してこの趙州狗子仏性の話は公案として使用され、非常に大きな比重をもつものである。この趙州狗子仏性の話を以て、その宗乘たる無に到達し無を顯現するところのものである。又説明のない言葉のみのものも十四回位出されているようである。第一類第二類と第三類とを比較する時、第三類がこの宗乘として如何に重要なものであるかが分る。この外、欲知仏性義の涅槃經の經文の百丈禪師によつて用いられたものが二回、又この文句を大慧禪師の言葉として用ひられたもの一回等がみられる。

大慧禪師にみらるる如来蔵思想仏性思想は以上の如きものであるが、趙州狗子無仏性の話はとくに留意すべきものである。

宏智禪師は他の機会にゆずりたい。